

古代史教養講座 創立1995

松戸市常盤平 2-18-9

〒270-2261 電話 (047)384-5728 <http://www.geocities.jp/kdil1995>
振込銀行口座 三井住友銀行 飯田橋支店 普通預金 6355550 口座名・古代史教養講座**本ニュース306号は9～10月号です。****当会ゼミは9月と10月も休講とします**

8月に入りコロナ感染者は100万人を突破した。世界では2億人を突破している。感染力が強いデルタ株が猛威を振るっており、新型コロナ感染者は1万5人以上/日を記録している最中に、政府は「入院制限」を打ち出し中症化以下は切捨てられる。一方で、40～50代の働き盛りの人々の重症化が急増している。科学者の忠告を無視した五輪強行が国民の生命と健康を危機に晒している。

一方、ワクチン接種は、65才以上の76.9%が2回接種を終えたが、全体の接種率は30.5%と低水準である(7月末・首相官邸資料)。当面、政府の言葉だけの警戒宣言と無策では感染者数が減る環境は見通せない。従って、9月と10月も休講とします。尚、万が一、11月にゼミを再開できる環境となった場合は、実施日は会場の都合で第1土曜日の11月6日ではなく、**11月13日となります**ので予めお知らせします。尚、本件は10月編集の古代史ニュース307号でも改めてお知らせします。

ヤマト政権の誕生

— 齊藤 潔 会員記 —

ヤマト政権という言葉は、高校教科書で使用されている歴史用語である。又、他には大和政権、大和朝廷、倭政権とも呼ばれている。ヤマト政権の所在地は、日本書紀(以下『紀』)や古事記(以下『記』)では畿内地域が比定されており、外交、財政、軍事面で優越した政治権力を保有していたと解釈される。その証拠とされるのは、畿内で誕生した箸墓古墳を初め多数の巨大古墳である。この事から、この古墳はヤマト政権の歴代の王と親族とそれを支えた有力豪族らの墓と考えられる。更に、古墳から出土した副葬品(鏡、玉製品、農工具、刀剣・武器、武具、馬具、金銅製装身具)は、量や質の両面で圧倒的優位さがあげられる。一方、畿内のヤマト政権とは別に、各地に地域政権(筑紫・出雲・丹波・吉備・尾張・毛野)が存在した事も、100mを超える多数の前方後円墳や豪族居館

の存在や『紀』や考古銘文(江田船山古墳出土鉄刀・埼玉稲荷山古墳出土鉄剣・松江市岡田山1号墳出土鉄刀・市原市稲荷台1号墳出土鉄剣)等から推定される。本稿は、ヤマト政権を中心に、邪馬台国の女王を共立した倭の事、ヤマト政権の誕生時期、そして律令政権の誕生に付いて、『記紀』をはじめ内外の諸文献や考古資料を参考にして王と豪族の關係に焦点を当てて述べる。

第1章:邪馬台国時代の倭とヤマト政権

1、邪馬台国女王卑弥呼を共立した倭(以下、女王の倭)

①中国史書が語る邪馬台国時代の倭

239年、倭の女王(卑弥呼)が魏に遣使して、「親魏倭王」の称号を賜る(『魏志倭人伝』)。

247年、卑弥呼が死んで男王が立ったが國中治まらず、共立されて宗女の台与が13才で立つ(同上)。

266年、倭の女王台与が西晋(265～316年)に遣使(『晋書』)。○女王の倭は西晋誕生の翌年に遣使。

○「女王の倭」は、日本列島の全てのクニグニを含んでいない。『魏志倭人伝』では、狗奴国を初め多くのクニグニが女王の倭に属していないと記している。

413年、倭国が東晋(317～420年)に遣使(『晋書』)。

○413年の倭の東晋への遣使は女王の倭とは限らない。即ち、倭は317年に南遷した東晋に対しすぐには遣使していないのである。266年から413年迄の147年間に倭国に重大な変化があったと想像される。

2、4世紀末～5世紀の倭

◎『高句麗好太王碑文』(414年建立)記載の倭

碑文の記載は391年～407年の17年間である。

391年:倭軍が渡海し百済を破り新羅を臣民とした。

399年:高句麗が倭と連合した百済を攻撃。

400年:高句麗5万の兵で新羅城から倭を追出す。

407年:好太王が親率し帯方界で倭を壊滅させる。

◎413年、倭国が東晋(317～420年)に遣使(前出)。

◎宋に遣使した「倭の五王」(『宋書』):421年～478年

421年と425年:倭王讃が遣使。

年代不明:倭王珍が遣使。倭王に安東將軍を、倭隋ら13

人に平西・征慮・冠軍・輔国將軍を授与。

438年と451年:倭王済に使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事・安東將軍を、23人の倭の將軍に軍郡号を授与した。

462年:倭王興に、安東將軍・倭王を授与。

478年:倭王武に、倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事 安東大將軍 倭王を授与。

◎宋の順帝に宛てた倭王武の上表文の要旨

「祖父の代から東の毛人と西の衆夷を征服し、更に渡海して海北(朝鮮)を平定し領土を拡げた。又、高句麗が百済を侵略して、宋への朝貢路を閉ざしたので、高句麗征伐を執行したい」

①『好太王碑文』の戦争記事と『宋書倭国伝』の倭王の軍郡号授与の文脈から、倭と高句麗間の戦争は好太王時代の17年間だけでなく、息子の長寿王(在位413～491年)の時代にも継続していたと推定される。

②倭王武は479年に斉と502年に梁から軍郡号を授与されたが、これは両国が自ら新王朝を慶賀して倭に授与した一方的なものである。倭王武が478年以後遣使しなかった理由は、南朝の権威・権力の無さへの失望と首都建康への航路の重要拠点である山東半島が北朝側の領土となったからであろう。

③南朝鮮で高句麗と戦争した倭は、軍事力とその継続力の面から、シャーマン「女王の倭」ではなく、政治力、経済力、武力に富んだ有力政権＝倭の五王である。従って、413年に東晋に遣使した倭は、「女王の倭」ではなく、倭の五王系の倭政権である。

④倭王珍の遣使での倭隋ら13人と倭王済の遣使での23人の將軍に倭王と共に軍郡号が授与されているが、これは倭王側が上表にその旨を要求したので宋側が配慮して授与したのである。倭隋らに授与された軍郡号は王と將軍間に特別の差はないという知見があり、王と將軍(豪族)間の関係は相対的と解釈される(後述)。

3、空白の147年間(266～413年)とヤマト政権

①この時期の中国・朝鮮に倭関係の史料がないので、日本の古墳の副葬品で推定する。邪馬台国が存在した3世紀の副葬品は、呪術的(鏡・玉・鉄の武器・農工具等)なものが多く被葬者は司祭者的と想定されている。これが4世紀末になると副葬品は武器(刀劍)・武具(甲冑)・馬具等が多く軍事的となり、被葬者は武人的と想定されている。この古墳の副葬品の変化は、「女王の倭」からヤマト政権の倭への変化に符合する。

②空白の4世紀は、クニグニの王が邪馬台国のシャーマ

ン女王を共立した倭の体制が崩壊して、群雄割拠の戦国時代になった時代である。この戦国時代を経て、クニグニの王は、武力、財力、知力の面で優れた政治的有力者を、リーダーとして選定する連合政権を誕生させたのである。その成立時期は、高句麗と交戦した391年前後と思われる。つまり、5世紀前後に誕生した政権がヤマト政権であり、宋に遣使した倭の五王である。

4、倭王武は『紀』の雄略天皇である。

①「倭王武の上表文」(前出)で、武は高句麗による百済滅亡(漢城陥落・王殺害・475年)に言及している。一方、『雄略紀20～21年条』にも百済滅亡と復興の記述が見られるので、倭王武は雄略に比定される。倭王武が雄略と一致した事により、倭の五王は畿内に本拠を置いたヤマト政権と思われる。

②ヤマト政権の成立は5世紀前後と考えられるので倭王は、讚かその前の王の時代という事になる。そして、上表文にある通り、倭王武＝雄略の時代に列島の東西を治め、南朝鮮に迄勢力を広げた画期を迎えたのだ。

5、『雄略紀』の雄略天皇

①雄略天皇の即位の場所は、「泊瀬(奈良県東南部)」とあるので、政権の所在地は奈良である。

②雄略は允恭天皇の第五子だが、同母兄の安康天皇を殺した眉輪王と彼に同情した2人の同母兄と彼らをかかまった大臣の葛城氏ら全員を殺した。又、先代の安康が天皇候補としていた皇子とその弟も騙し討ちにした。政敵の皇子全員を殺して即位した。彼を支えた豪族は、平群真鳥(大臣)、大伴室屋(大連)、物部目(大連)である。即位後も自分に従わない吉備、伊勢、丹波等の豪族を倒した武断的専制君主として記述されている。

③この時期の雄略の支配領域は、西は九州から東は西関東以内と思われる。それは、『安閑紀1、2年の条』に、屯倉(政権の直轄地)の場所として「西は筑紫・豊・火・備後・婀娜(場所不明)・阿波・紀・丹波・近江・尾張・武蔵・上毛野の13国」の記述が参考になる。

④新羅との戦争や、熊津に南遷した百済を再興した。

⑤万民良治を自賛:天下は一つの家に治まり、竈の煙は遠くまで立ち上る。四囲の夷もよく従っている。

⑥万葉集冒頭に雄略の歌が掲載されている。編者の大伴家持は言伝えて画期の大王と見なしていたようだ。

第2章:ヤマト政権時代の大王と豪族

ヤマト政権は先述の通り5世紀前後に成立したが、それから天武が壬申の乱に勝利して、飛鳥浄御原令と国史の編纂を開始した681年までの約300年間のヤマト政

権を、政治機構や『神武紀』以降の血みどろな大王位の争いを分析して、大王と豪族の関係を検証してみよう。尚、「天皇」の称号は歴史上は天武天皇から始まるので、それ以前は大王と記述する(後述)。

1、ヤマト政権の政治機構(高校教科書)

- ①中央:大王—大臣・大連(有力豪族。国政担当)—伴造(中小豪族・渡来人。政権の軍事・財政・祭祀・品部)
- ②地方:豪族が部曲(カキベ・私有民)と田荘(タドコロ・私有地)を保有。又、ヤマト政権から国造に任命され、屯倉・田部と名代・子代(大王家の直属民)を管理。
- ③ヤマト政権は、大王家を中心に畿内中央豪族(和爾・平群・葛城・巨勢・羽田・蘇我・大伴・物部)で構成され、大王家の軍事・警察には大伴・物部氏が担当。
- 豪族は政権の政治・軍事・財政・生産分野から地方の屯倉経営等の全てに関与している。大臣・大連・伴造・国造となった豪族は、私有地からの収入に併せ、中央・地方の官職に見合った収入も得ておりその財政は豊かだった。これを大王が王と臣下の関係(冠位制)に変えて、豪族を官人に組み込み、給与制(律令体制)とし中央集権化を図ることが王権の最終目的である。

2、『紀』に記載の大王家と豪族の争い

- ①『神功皇后紀』: 応神は母の神功皇后と大臣の武内宿禰が異母兄2人を騙し討ちで殺害した後に即位した。
- ②『仁徳紀』: 仁徳は大王位を狙う兄の反乱を征伐した後、大王候補の弟の自殺で即位した。
- ③『履中紀』: 履中は反乱を起こした同母弟をもう一人の同母弟に殺させて即位した。
- ④『安康紀』: 安康は群臣の支持を失った大王候補が自殺した事で即位した。しかし、安康は讒言を信じて、ある王族を殺しその正妻を皇后にした。安康はその王族の子の眉輪王に殺された。
- ⑤『雄略紀』は先述の通り。
- ⑥『清寧紀』: 雄略の皇太子の清寧は、吉備氏を母に持つ異母弟の星川王子らの王位を狙う反乱に会った。大伴室屋が鎮圧して諸臣を率いて推戴して即位した。
- ⑦『武烈紀』: 履中大王の孫の武烈は、政権を握っていた大臣の平群真鳥が大王になろうとしていたのを知り、大伴金村に征伐を命じた。大伴は大兵力で平群父子を殺した。暴虐な武烈は大伴金村を大連にして即位した。武烈の死後王位を継ぐべき王子がいなかった。そこで、近江・高島の彦主人王と越前の振姫の間に生まれ、越前三国で成人した継体が、大伴金村、物部鹿火、許勢男人らと諸臣に擁立されて即位した(新王朝)。

⑧『継体紀25年条』の継体父子暗殺: 継体死去に際して、『百濟本記』を引用して「日本の天皇及び皇太子・皇子皆死んでしまった。後世、調べ考える人が明らかにするだろう。」とある。これを辛亥年の変と言う。

- 私の解釈: 欽明が辛亥年にクーデターを起こして継体と王子の安閑・宣化を殺したのである。証拠は、熊本江田船山古墳出土鉄刀の銀象嵌銘文(以下船山)と埼玉稲荷山古墳出土鉄剣金象嵌銘文(以下稲荷山)である。先ず両銘文共に、仕える大王名は「ワカタケル」とあり、その支配領域は「天下」と記している。天下とは、出土地の熊本や埼玉と言った限定地域ではない。その領域は、先述の『安閑紀』記載の屯倉を置いた国名のある九州から西関東までの地域である。次に、銘文象嵌の鉄刀と鉄剣の年代推定である。「船山」は銘文に年代表記がないので、鉄刀と同時に出土した資料(鏡・金銅製冠・宝飾品・大刀・甲冑・馬具等)から推定すると、6世紀上旬とされる(福岡大・桃崎祐輔教授)。他方、「稲荷山」は銘文に「辛亥年」とある。即ち、6世紀上旬の辛亥年は531年である。欽明は、継体の外交(朝鮮出兵、朝鮮権益割譲等)の失敗や内政(磐井の乱)の動揺に危機を感じた豪族(大伴金村・物部尾輿・蘇我稻目)らの支持を得て、クーデターを起こし継体父子を殺害したのである。『欽明紀』は、「年、若干で即位し都を磯城島シキシマに遷した」とある。即ち、ワカタケルは若大将の意味であり、又、「稲荷山」鉄剣銘文にある「斯鬼シキ宮」のある都は、『欽明紀』記載の磯城島と一致する。
- ⑨『崇峻紀』: 蘇我馬子と物部守屋が、夫々大王候補を立てて対立した。馬子側は守屋が擁立を謀った王子と友人の王子を殺害した。587年、馬子は大王候補の崇峻や多数の王族と豪族の軍勢で守屋らを殺した(丁未の乱)。崇峻は大王位に就いたが、その後馬子と崇峻は対立した。馬子は大王側の馬子殺害計画を察知して、配下の東漢氏を使って殺害した。
 - ⑩『皇極朝』: 蘇我蝦夷・入鹿親子が政権の中枢にいた皇極朝の643年に、山背大兄に人望が集まったが、古人大兄を推す入鹿に襲われ自殺。645年に、蝦夷・入鹿親子は大王家の中大兄と中臣鎌子らの豪族らによって謀殺された(乙巳の変)。蘇我氏は稲目、馬子、蝦夷、入鹿と4代が100年間以上7代の大王の下で政権を担当した。実際は大王家だったと思う。
 - ⑪『孝徳紀』: 大化の改新の項で、公地公民制・国郡制・班田収授制・新租税制等で律令制を志向したと記す。

しかし孝徳朝では実現していない。実現には王権の強制力と多数の協力者が必要である。この記述は天武朝に先行して孝徳・天智朝で既に計画・実行していたと見せかける目的で、後世に挿入した事が疑われる。

5、結論

- ①『神功紀』から『皇極紀』までの大王・豪族間と王族内の息の詰まる争いを見てきたが、雄略以外に、大王の超越的地位は見られず、豪族との関係は相対的で倭の五王時代と同様に、政権は豪族との連合体制だった。
- ②王族間の争いは大王位を狙う争いである。大王は大王の決めた王族が即位する慣習だが、これに不満を持った王族から反乱が起こり、勝利した王族が就任する。豪族らの支持を失った大王候補は、他の王族や豪族によって排除(殺害、自殺)される。大王が不時の事件で死去して後継候補が未定の場合は、多数の豪族の支持を得た王族が大王位を獲得する。政敵を殺して大王位に就いた者が、その政敵の子に殺されるケースもある。中大兄は雄略同様、全ての政敵を殺して大王となったが、結果は天武と言う別の王族(又は豪族)によって天智王統は絶たれた。『紀』の王族の殺し合いの記述は、明治期の造語である「万世一系」(大日本帝国憲法第1条)とは矛盾すると思う。

第3章:天武の律令国家

- 1、白村江戦:661年斉明死後、天智は大王候補として大本營の置かれた博多で百濟救援の為に倭軍の指揮をとった。663年に白村江で、唐・新羅連合軍と海戦となり倭軍は全滅した。664年に唐の占領軍が筑紫に到着した。天智は豪族・人民の反対を押し切って都を飛鳥から近江・大津に遷都し668年に即位した。天智が671年に死ぬと672年に大友皇子が近江政権を継いだ。以上が『天智紀』の記述である。一方、『扶桑略記』(皇円編・11世紀末から12世紀初成立の私選史書)には、「天智は馬で山科に行き行方不明になり、そのまま戻らず死んだ」とある。天智は暗殺されたともとれる。
- 2、天智暗殺論:天智は白村江での数万の倭軍敗北の責任を取らず即位した。戦後も、玄界灘や瀬戸内海の沿岸に国防施設を築く等の負担を豪族や人民に強いた。豪族や諸臣の度重なる不満に対して、天智はこれに応えることなく近江に逃避したのである。天武と豪族は連合して大義に反した天智を暗殺したのである。
- 3、壬申の乱
天武は親族の王子らと共に、畿内を初め、東国・西国の中小豪族を味方につけ、畿内では軍事豪族大伴氏

の支援を受けて近江側に勝利した。近江側は、中臣金、蘇我赤兄や巨勢比等らの畿内豪族の武力が中心で対抗したが敗れた。大友王子は物部麻呂に看取られて自殺した。しかし、物部麻呂は戦後の天武から元正朝まで一貫して重用されている。麻呂は最初から天武側の間者として大友王子を監視していたように思う。

4、天武・持統天皇

- ①天武は漢の高祖(劉邦)を真似て新王朝を宣言し、672年に飛鳥浄御原で即位した。彼は律令制を目指した。飛鳥池工房で「丁丑年(677年)」と墨書した木簡に「天皇」と記した文字が出土したので、677年までには「天皇」号を称したと推定される。天武は新体制の律令国家で、それに相応しい「天皇」号(同時代に唐の高宗も一時名乗る)を名乗ったのであろう。
- ②684年八色の姓、685年冠位60階制(皇族と諸臣の階層化)、681年飛鳥浄御原令編纂開始等で皇族と豪族の身分の序列化を図り、皇族・豪族を官僚制に組み込んだ。更に、皇族・豪族の経済的基盤である部曲を廃止し官人給与制とした。こうして、天皇と豪族はこれまでの相対的から絶対的関係へと変化し、天皇と豪族間の距離を上げた。この為、天皇への権力集中には豪族から不満が生じたが、自ら武力で権力を奪取したカリスマの天武・持統が制定した律令制が機能している限りは、豪族らも一介の官人という立場に制度化され身動きできなくなった。こうして、5世紀前後に誕生したヤマト政権は、天武・持統朝で初めて天皇が豪族との横並びから上下の存在となった。豪族は太政官の長官を最高位として、政務に関与することになった。
- ③『日本書紀』は統一国家の証明書だが、天武・持統の編纂は彼らの日本支配の正当性を示すのがその目的と思われる。天武は天智の弟とし、持統は天智の娘と位置付け、伝承された神話を総動員して、天武・持統を神裔として描かせた。『神代紀・天孫降臨』の段では、タカミムスビが天武、アマテラスが持統、アメノオシホミが草壁、そしてニニギが文武と読める。『神代紀・神武誕生』の段では、山幸彦が天武、妻のトヨタマヒメが持統、その子のウガヤフキアエズが草壁、妻のタマヨリヒメ(トヨタマヒメの妹)が元明(持統の妹)、そして、その子の神武が文武と読める。尚、神武の大和入りの戦物語は天武の壬申の乱がモデルであり、又、天武の死後、持統は子の草壁皇太子の地位を守る為、異母弟で優秀な大津皇子を藤原不比等と組んで謀殺した。これが『神功皇后紀』のモデルである。以上。